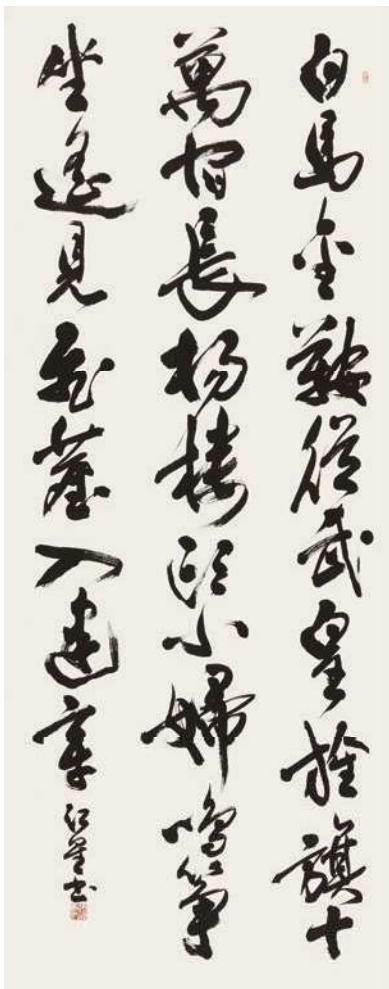


第78回 日本書芸院 三月審査会

日本書芸院史邑賞

「漢字部」

- 作品掲載は五十音順を原則としましたが、作品の形式（縦・横）により一部前後しています。
- 篆刻部作品は印影のみ掲載しています。
- 機械の都合上実際の色とは異なる場合があります。ご理解、ご了承のほどお願いします。



伊藤江星



秋吉栄華

日本書芸院史邑賞



足立香月



石坂黃姚

大田香雨



岡田 賢城



岡田 美琴

加藤聖岳



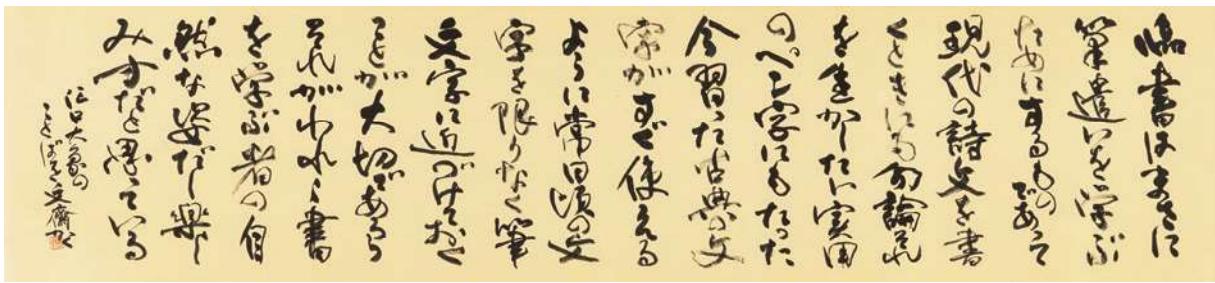
金尾美景

色蘭霧山曉雨聲，物絃圓心憶落花。
不堪如首輕如葉，風為裳而雨為珮。油然空久
寂寞憂清長，晴長晴晴雨微微。
杜詩亦要各端奇，支郎西儀山因自傳。

鳴田清仙

樹叢立如舞，雪峰搖空綠。遙邇也無名，可憐的。查雲深，望滿林。
壁面紅影翻，玉枝飄舞於清樓。中秋月照深林，氣為寒徹。君知否，主流
自流。風露重，玉樓高。生對銀蟾，曉露重，玉砌痕。未可言，見玉樓謝爾。
且隨月當也，向何人。此處不無楊柳日聞清音，方證。

小谷冬華

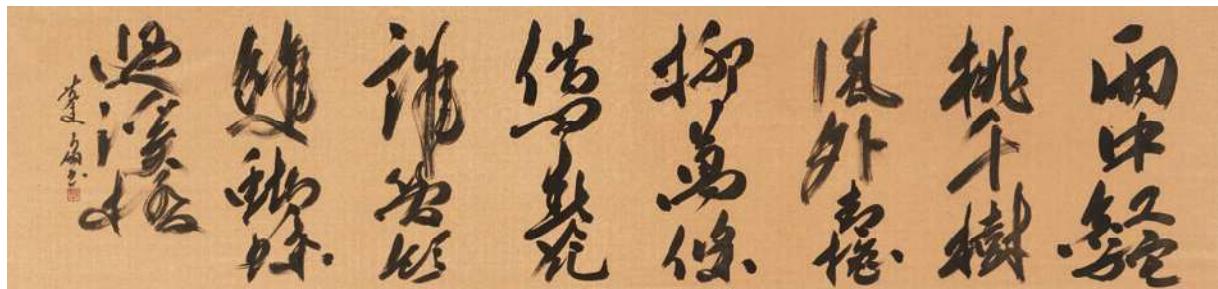


川村文齋



田中克明

日本書芸院史邑賞

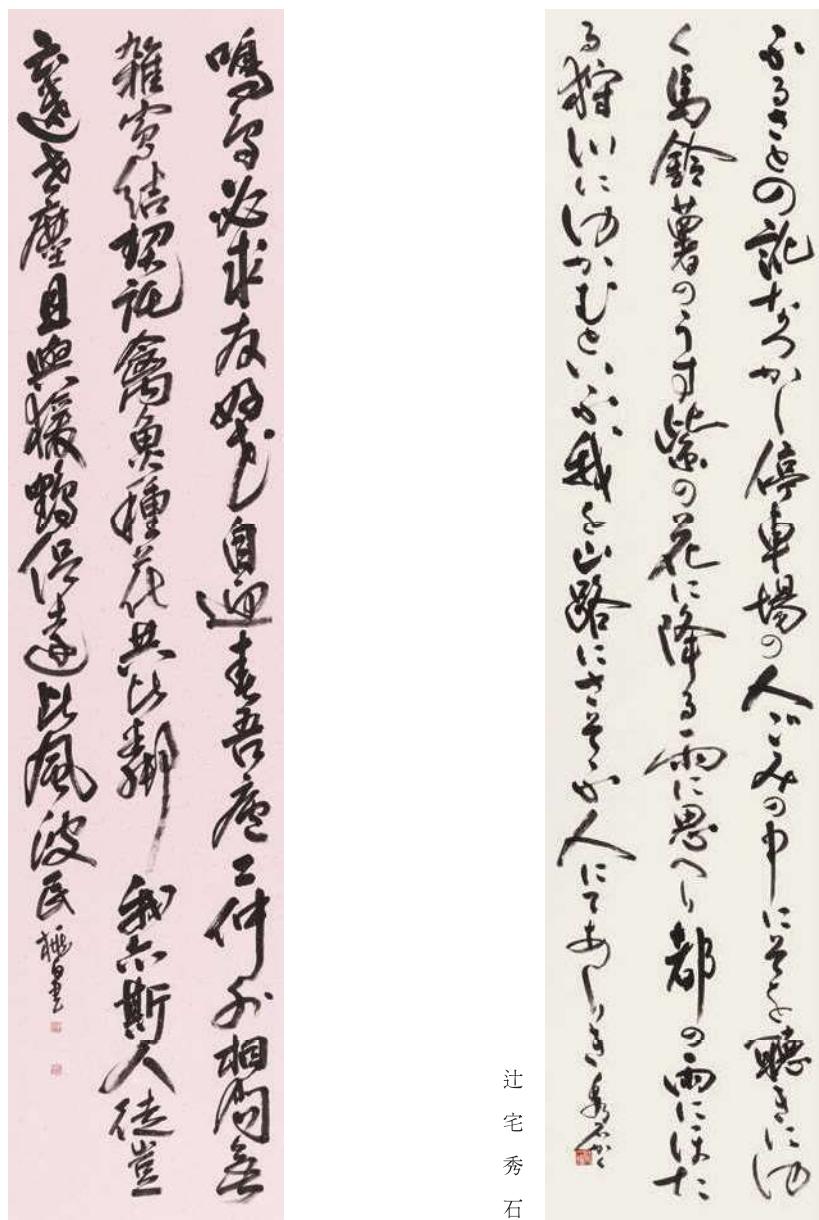


久保蓬扇

世短意常為期人樂人生日月併度至
舉目仰天念名露濱館外風穿漱石處
因往昔無遺影予每有餘懷一發其心
辰巳紫瑛

而望遠山東南根柢高峯仙山少留五色埃
於物生靈弄葉揚蕪草木三三枝繁亦甚裁紅
淚水傳青色猶為綠衣清影方寸青如翠葉纖織留
況有此山石萬古蒼苔尚為此而煥生波瀾仰之空氣
猶若白壁日復深年墨翁何三言初於和在書

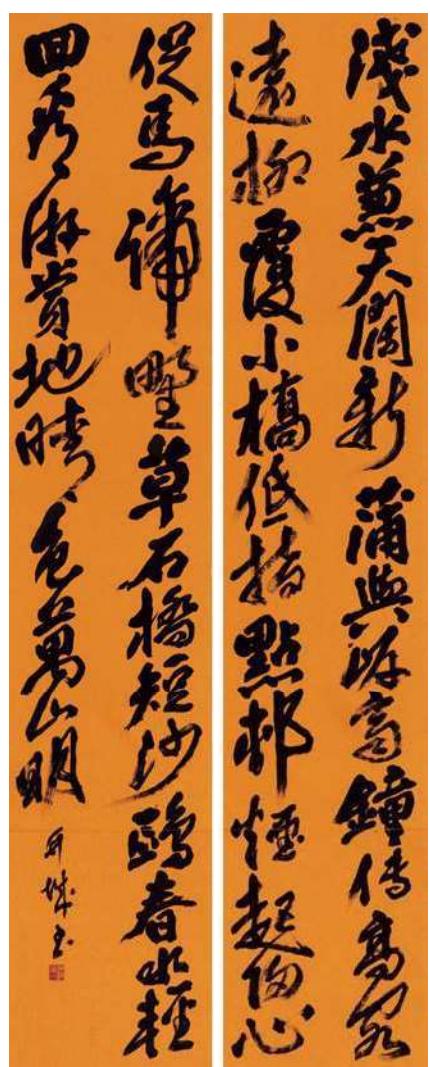
津田聖月



富田桃白

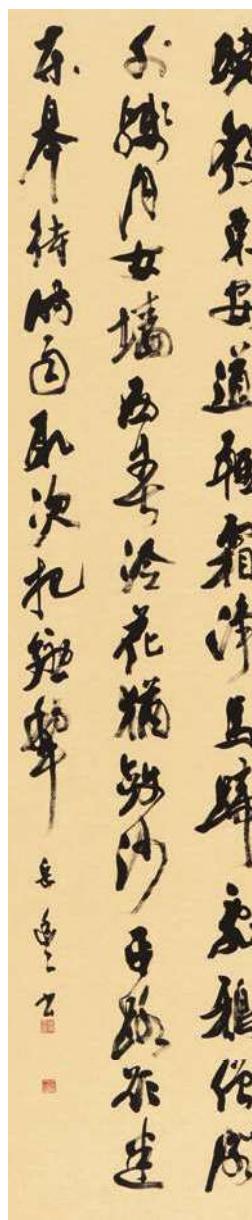


仁科惠椒





沼本游香



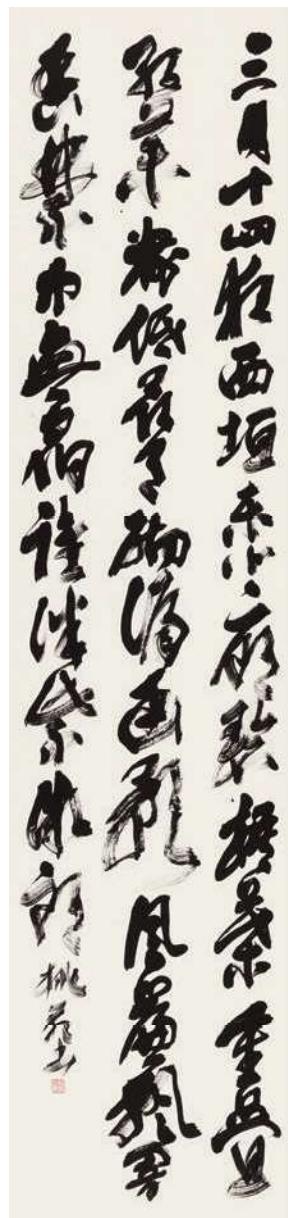
野田岳豊



西本澄園



日 向 麗 雪

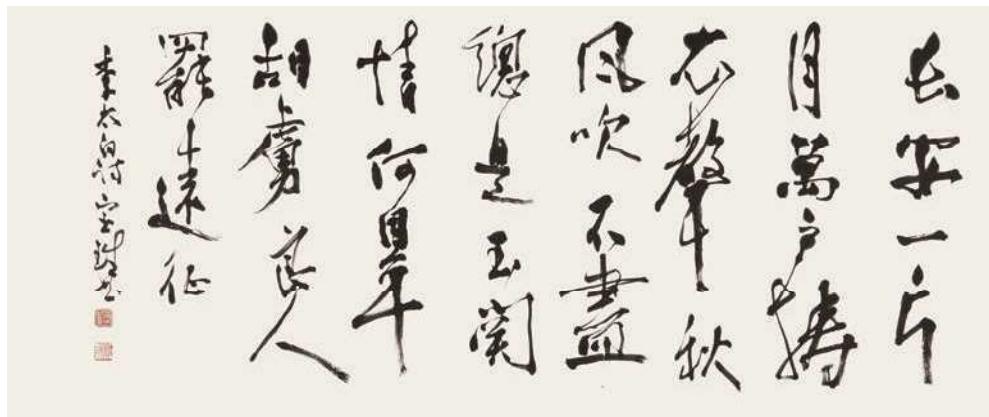


福

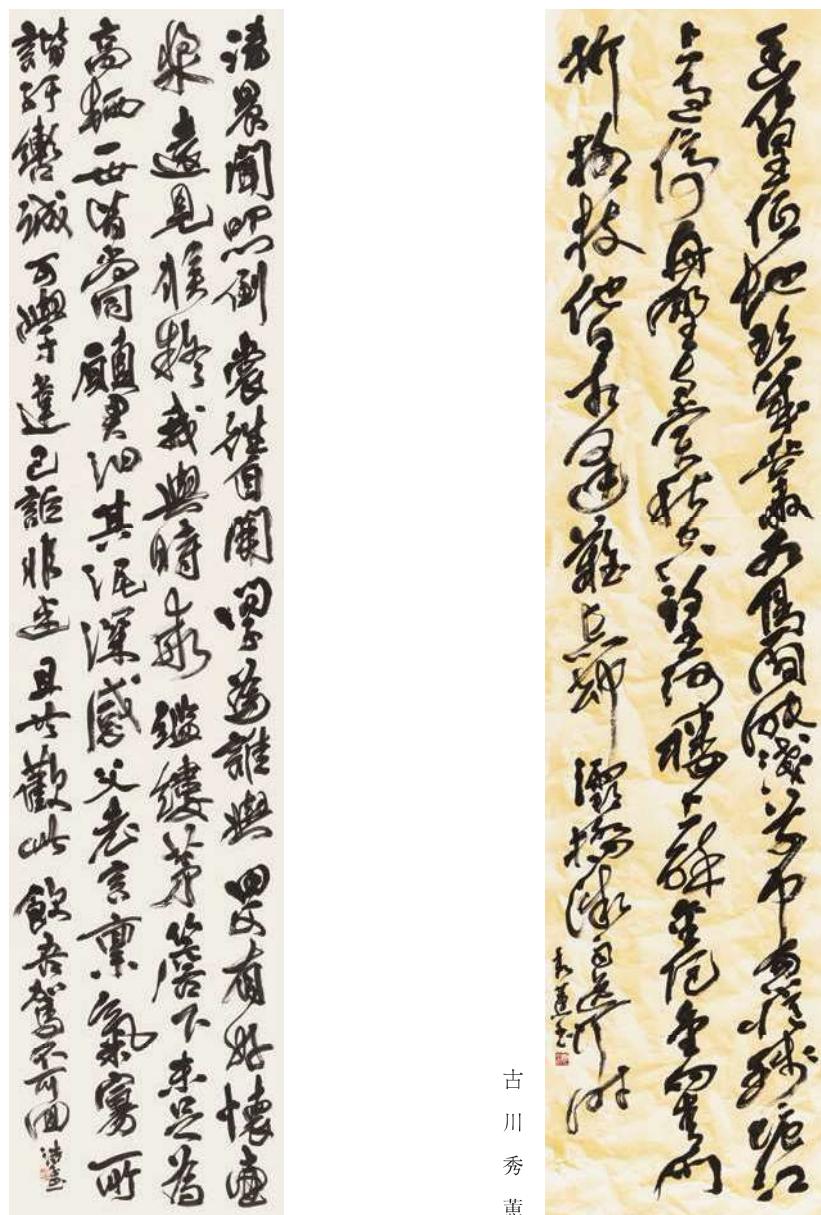
桃
苑

いつものことだが電車は駕籠だった。これが若者と娘が腰を抱き合って立っていた娘が立つてどしゃりに座りました。手も足も上部が整った車を買わずにまかまくは次の駅で降りた娘は坐った別のところへ娘の前に横あらわし押されましたが娘はうなだれながら又立つて席を立つておいたところは次の駅で礼を見て降りた娘は坐た二度あることはとさう通り別へども娘の前に押し出された可哀想に娘はうつむいて今度は席を立たなければ次の駅で次駅まで下唇をまとめて噛んで身体をこねばまことに僕は電車を降りた。困くなつてうつむいて娘ほどいなくて行をうやめて心の持主はいつもどこかへ飛んでしまう愛難者となる何故ですか。心の持主は大人のことを自分のことのように感じる。うつむき心に青ざめながら娘はどんづらげたがうし暮れて、気持を差し失せ見出

春 田 舟 雅



森本宝珠

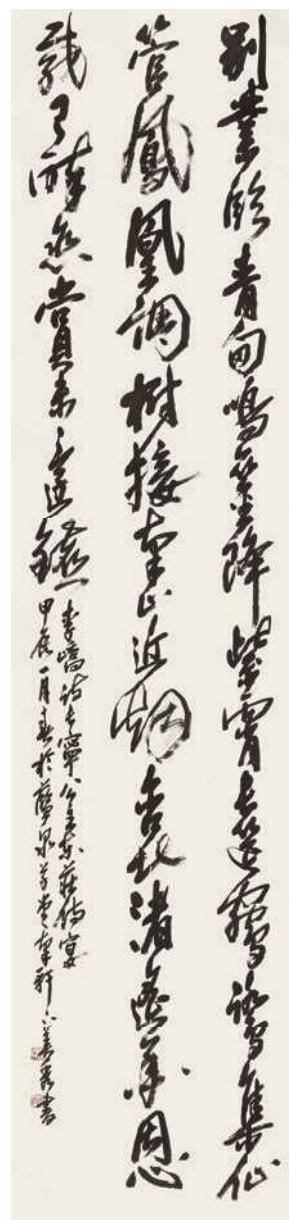


古川秀蕙

古本浩子



安田 悠 泉



前島 美秀



真鍋 華苑



山本蘭巡

涼風起江雨
萬樹盡秋聲
搖落豈堪別
躋躇已復移帆
過京口渡砧響
石頭城為我歸
宜卑高堂白髮生
雁回南齊暮
魂消默坐中
賦詩乍作古愁窮
欲成翁羽空
灑侵爐西庭翻
畫筆畫風山秀
猶解事未遣酒樽

松岡友子

重得望鶴尚
宵伴重雲游
人是度年年
香織聲晚
蕭然常夕陽
意猶歸盡涼
跡未復人烟
忘食食忘年
隨家見故時
念此誰知舊
淵淵淮湖處
幽幽故
歎望月終是度
天人昇華月
劉長卿詩書青娥

松浦青娥

江郎才盡猶未已，不識天時亦可憐。
但使君歸能如許，城南風雨小年華。

村川了孔

越後守即之以禮而退之。時嘗與其子子雲、子瞻、子由游於京師，人皆稱之爲三苏。蘇子瞻與子由同知密州，子瞻作東坡居士，子由作長公。子瞻既失勢，子由亦不復得志。元祐末，子瞻卒於汝州，子由送之至洛陽，作此詩。其子子瞻、子由、子雲，皆有文名，子瞻尤著，人稱之爲三蘇。

森本夏溪

不與太倉東家不窓之在山林有此佳
處。獨一枝竹因然柳不曉霜葉夢應
寒。子。近高書宿公承桂。翔龍。

矢倉翔龍

赤壁同醉被東風指折一枝
作雨絲舞向懷故人。更隱去計
得。今。到。與。用。是。十。秋。無。事。九。月。八。日。

吉田万里子

誠國有珠閣高少勢林端唐日渺乎
楚青山生暮寒歸人亡也空其迷樹望
中原之夕雲門因夕人退戒壇憲明

脇田憲明

日本書芸院史邑賞